

ウィーンでの出会い

山崎 真理

ウィーンへの派遣が決まって私がまずしたことといえば、ガイドブックを見て観光名所のチェックをすることでした。ガイドブックで見るウィーンは、とにかく美しい街並みで、「早く実際に見てみたい!」と、出発前はそればかり楽しみにしていました。しかし、帰国後の私が思い出すことは、ウィーンの町や建造物でなく、ウィーンで出会った様々な人たちのことです。

私たちを受け入れてくださったホストファミリーの方々、フロリズドルフ区の職員の方々、町やお店で会っただけの人との交流のひとつひとつが、私には忘れがたい思い出です。新しい出会いがあるたびに、新しい発見がありました。ホストファミリーから学んだことの一つに、「バケーションを楽しむ」ということがあります。あくせくした日本人の休暇とは違い、水泳や読書など、のんびりと自分のしたいことをして楽しむという姿は、私の目にはとても優雅に映りました。他にも、自分たちの伝統を守ろうとする姿勢や、オーストリアの歴史、オーストリア人のコーヒーに対するこだわりなどを教わりました。

しかし、私がこの滞在を通して一番深く学んだことは、自分がいかに勉強不足か、ということです。語学はもちろんですが、自分のこと、日本のこと、世界のこと、もっともっと色々なことを知りたいと強く思いました。「あなたはどんな人? あなたの国は(町は)どんなところ?」と聞かれたとき、自分が上手く答えられないということは、非常にショックであり、私は自分を恥ずかしく思いました。ウィーンの文化を教わり、それに憧れながら、日本文化への興味が深まったというのは、自分でもとても意外でおもしろいことでした。

これからは、ウィーンでの楽しく素晴らしい思い出と、そこから得た「学び」へのモチベーションを忘れることなく、今後ますます国際化する社会へ貢献してゆける人間を目指したいと思います。

最後になりましたが、今回このような機会を与えてくださった全ての関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。



オーストリア研修を終えて。

大濱 早紀



私は今回の海外派遣は自分にとって何かプラスになるかもしれない、海外に行くことは私にとって、とてもいい機会になると思い参加しました。

研修に行く前、私は特に何もオーストリアのことを知らずに行きました。

そんな私にとってまさに未知の国、オーストリアでは、毎日が驚きで、そして新鮮で、文化の異なる国について知るのとても楽しく、勉強になりました。

水着で料理するホストマザー、甘い緑茶、いたるところにある鏡、日本と違いビラやティッシュを配る人もいなければ、セールだからといって大声張り上げて品物を売る人もいない。キャッシャーの台に座っている従業員。地震も台風もない。

まさにカルチャーショックの連続で、あきることがなかったです。

ホストファミリーはみんな優しく、いつも笑顔で、私のわがままにいつも付き合ってくれていました。

帰国する日の朝、こらえきれず声を上げて泣く私を紙ナプキンくらい硬いティッシュで涙を拭いてくれて、「いつでも帰ってきていいのよ」といって優しくハグをしてくれたスージーママを思い出すと今でも泣きそうになります。

私はオーストリアに帰りたくて仕方ないです。

オーストリアの事、何も知らずに行ったのに、こんなに自分がオーストリアを好きになるとは思いませんでした。

私は今回の派遣で本当にすばらしい経験ができました。

とても書ききれない、伝えきれない、言葉にできない思いを経験し、私が想像していたものよりずっとずっと充実した楽しい時間をおくれました。

一緒にウィーンに行った団員の皆、私にこの機会を与えて下さったかた、関わってくれた全ての人に感謝しています。

ありがとうございました。

外国語でのコミュニケーション

伊藤智央



わずか15日間という短い期間でしたが最も印象に残ったことはグラーツに行ってホストの両親のところに滞在した時のことでした。ベランダでろうそくのあかりだけで夜遅くまでワインを飲みながら晩ご飯を食べましたが、このようなことも彼らにとっては当たり前前の生活のようでその生活スタイルに感銘を受けました。別に彼らが他の人とは違う特別な生活を送っているというわけでもなさそうでした。

しかしより印象的だったのはコミュニケーションにおいてでした。彼らはドイツ語しか話せないので会話は必然的にドイツ語となったのですが、私と話すときは私がいまいち顔をすると、違うドイツ語の表現で何度も言い換えてくれて必死でいろいろなことを伝えようとしてくれました。そして「あなたは日本人だから完璧なドイツ語を話さなくてもいいのよ」と言われたことが最も印象に残りました。そのときのニュアンスは「私が理解しようと努力するから気にすることない」というような感じのものでした。日本人は、どうしても完璧なドイツ語を話そうとする傾向があると思いますし、私もドイツ語に関してはきちんとした文で話さなければならないと思い、それまではなるべくきちんとしたドイツ語で話そうとしてきました。しかし、上のようなことを言われてからは、きちんとした文になっていなくて相手にとってわかりにくいであろうと思われる表現でもとりあえず話して、それで通じなければまた別の表現でとりあえず話してみるということでもいい、というように考えられるようになりました。それによって会話もそれまでより数段進むようになりました。そのような会話は人生の格言を集めた雑誌の記事を読みながら話したため、余計に話はずんで、そのうちドイツ語で話しているということさえ忘れてしまうほどでした。コミュニケーションにおいて重要なことは自分の意思や考えを伝えようとする努力であるとこのとき痛感しました。今度ウィーンに行くときまでには、さらなるコミュニケーション能力の向上に向けて努力して、もっといろいろなことをウィーンの人たちと話したいと思いました。

ホームステイの思い出

榎原 明彩子

我が家ではフロリズドルフ区から青少年を受け入れていて、私は今年16歳になったので国際交流に参加しました。

私を受け入れてくれたホストファミリーは家族のように接してくれました。一番お世話になった一つ年上の女の子。毎日ショッピングや美術館ショッピングなど、どこでも連れて行ってくれました。夕食後はテレビを見て一緒に笑ったり、会話をしたり、日に日に仲良くなれた気がしました。私の英語があやふやで通じなかった部分もたくさんあったと思いますが、心は通じ合うことができましたと思います。

また、10年前にフロリズドルフから葛飾区に青少年派遣として、我が家に来た方と再会ができました。その頃、私はまだ6歳くらいだったので、うっすらとしか覚えていませんが、彼女は私のことや私の家族のことなどはっきり覚えていてくれました。一晩でしたが、ウィーンの街を楽しませてくれました。

このホームステイを終えて、多くの人と出会えたこと、自分の世界が広がったこと、本当に貴重な経験が出来たと思います。

携わっていただいた多くの方々に深く感謝します。ありがとうございました。



ウィーン派遣の感想

蛎久 春香

葛飾区によるウィーン・フロリズドルフ区への派遣は私にとって長年心待ちにしていたものだった。私は幼い頃から音楽を学んでいて、ウィーンは音楽の都、モーツァルトやヨハンシュトラウスが活躍した都市ということを知っていた。何よりウィーンを身近に感じていたのは、私の家の最寄り駅の京成青砥駅にヨハンシュトラウス像があるからだ。その他にも私の友達が葛飾区の派遣でウィーンに行ったことや、大学でドイツ語を勉強し始めたこと、それから自身の旅行でウィーンに立ち寄ったことで、さらに行きたいという気持ちが高まり、派遣が決まったときは本当にうれしかった。

私がなぜ一回ウィーンに行っているにも関わらず、この派遣にこだわっていたかということ、やはり人と人との交流がしたかったからだ。私は国内外問わず旅行に行くが、ただの観光旅行では真の人の交流というものは難しいと思っている。旅行で接する現地の人々は、大体はツアーガイド、土産物の店員など旅行関係に携わる人々である。しかし、この派遣はホームステイという“現地で暮らす”という特別な旅であった。

私は、父・母・息子・娘で構成される Kieweler 家と派遣団員の一人、山崎さんと二週間を共に過ごした。私たちのホストファミリーは、夏の間は小さな湖の別荘で過ごすということだったので、葛飾区の友好都市のフロリズドルフ区ではなく、真逆の方向の別荘地で過ごした。だから他のメンバーと会うときは、小一時間かけてフロリズドルフに行った。

今年の夏のヨーロッパは猛暑で、普段エアコンがなくても暮らしていけるオーストリアも例外ではなく、私自身も耐えられないくらい暑かった。地下鉄も、バスも、ビルの中もエアコンが入っているところはほとんどなく、さらに照り返す日差しが強くて、干からびるかと思った。しかし、家に帰ると目の前には湖が！観光や訪問などから帰るとすぐに泳ぐという毎日だった。

ホームステイ先では、毎日のように、16歳の元気いっぱいなホストシスターと二時間くらい湖で泳いだり、キャッチボールをしたり、夕食後には必ずボート漕ぎをして、日が沈んだら湖のそばのベンチで語り合ったり、家の中で、ホストブラザーやホストファーザーも加わり、罰ゲームつきのカードゲームをして遊んだ。また、午後四時ごろには必ずおやつがあって、のんびりとした毎日を過ごした。

この二週間で何が一番良かったかということ、観光でもなく、町並みでもなく、音楽でもなく、他ならぬウィーンでの日常生活であった。二週間毎日観光ばかりしていたわけではない。二週間のほとんどが「ウィーン的生活」だった。それは、ただの観光客ではなく、言い方は大袈裟だけれどウィーンに暮らす一市民として、またホストファミリーの一員として生活していた。近所の人にドイツ語で挨拶する、食事の準備をする、洗濯をする、オーストリア風に挨拶をしながらお店に入る、夏休みの休暇を楽しむ、家族の団欒を楽しむなど、私もウィーンの一部に溶け込んでいたようだった。特にホストシスターとは冗談を言

ったり、じゃれたりと姉妹のように過ごした。それが何よりこの派遣によるウィーン滞在を深く印象付けた。

お世話になったホストファミリーや、フロリズドルフ区の方々、葛飾区の職員の方々、それから何より、葛飾区とフロリズドルフ区が友好都市であることに感謝したい。また、ウィーンで暮らそうと思う。

